

農学委員会・食料科学委員会合同 農芸化学分科会（第21期・第1回）
議事要旨

日時：平成20年12月16日 15:00—16:50

場所：日本学術会議6階6-A(1)会議室

出席者： 阿部啓子、磯貝 彰、磯田博子、上野民夫、大田明德、佐々木幸子、清水 誠、
長澤寛道、西澤直子、森 敏

欠席者： 磯部 稔、上野川修一、坂神洋次、佐藤文彦、鈴木昭憲、富田房男、中西友子

議事内容

1. 議事に先立ち、磯貝世話人から、20期に設置されていた農学基礎委員会、生産農学委員会が、21期においては土壌関係を分離する形で農学委員会に統合されたこと、新たに設置された食料科学委員会と農学委員会が農学系委員会として活動することが説明された。また、農芸化学分科会は農学委員会・食料科学委員会合同の分科会であるが、主たる所属は、食料科学委員会であるとの説明がなされた。また、こうした状況のもと、農芸化学分科会は、資料の委員で構成されることになったことが報告された。
2. 委員長、役員を選出について議論がなされ、任期の途中で交代する可能性もあることを前提に、委員長として磯貝会員が選出された。また、副委員長として西澤会員、幹事として太田、清水の両連携会員が選出された。
3. 「日本の展望」への農芸化学領域からの提案として、磯貝委員長が11月末に提出した文章およびその要旨が配布資料として示された。農学からの主張に盛り込むべき新たな点があればメールで委員長に伝えるよう要請がなされた。
4. 11月22日に京都大学百周年時計台記念館で開催された学術会議近畿地区主催（本分科会共催）のシンポジウム「食の安全と科学」について説明があった。この分野は学術会議でも重要視しており、シンポジウムの内容は「学術の動向」に特集として掲載される予定である。
5. 分科会の今後の活動計画について議論がなされた。
 - (1) 佐々木委員から、GMOの問題を学術会議で取り上げる必要があるのではとの提案がなされた。植物野外実験等の実施に多くの規制がかかり、学術の進歩を阻害していること、食糧の輸入加工関係の業界がGMO作物を利用できないために困難な状況に直面していることなどが示され、この問題に関わる問題点についてフリーディス

カッションが行われた。BSE問題でも、学術会議会長から最先端の科学レベルで安全と判定されたものが受け入れられない社会への危惧が表明されるなど、科学とリスクコミュニケーションの問題を考えていこうとする気運が高まっており、GMO問題についても学術会議からの意見の発信が必要であること、そのためにはまず本分科会からこの問題を上部の委員会に提案して、議論の場を形成するのが良いということで意見の一致を見た。

- (2) その他の活動計画として、20期に引き続き、サイエンスカフェ、各学会が開催するシンポジウム等の共催などを進めるとともに、それ以外の活動についても今後検討していくことになった。

6. 20期から21期にかけて学術会議の中の「農」の存在感が弱まっているように見えることから、本分科会にも他の委員会・分科会との連携を強めながら農学分野のプレゼンスを高める努力が必要であることを確認した。

以上